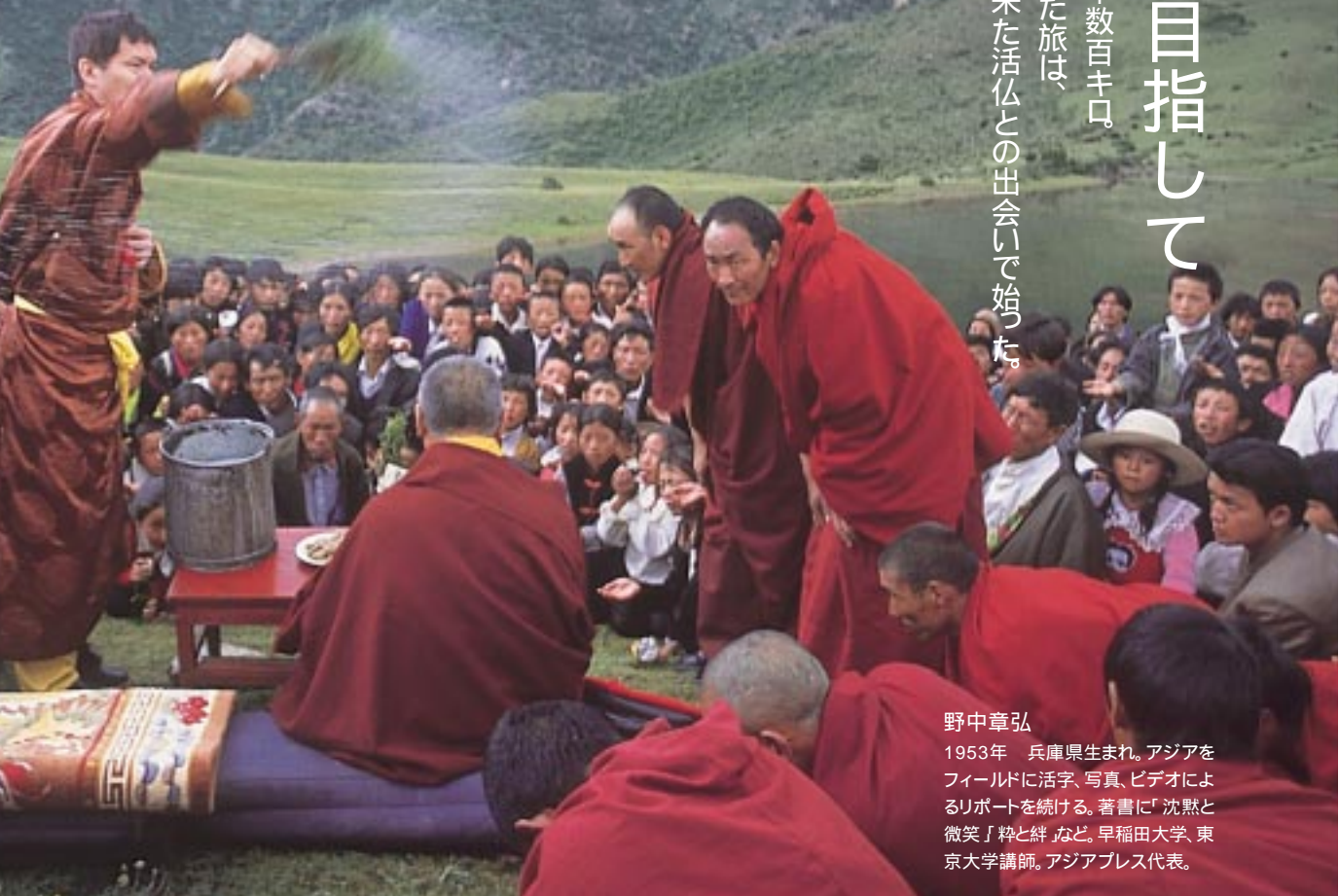


はるか東を目指して

チベット高原から五千数百キロ
長江の河口を目指した旅は、
高山病とスイスから来た活仏との出会いで始まった。



野中章弘

1953年 兵庫県生まれ。アジアをフィールドに活字、写真、ビデオによるレポートを続ける。著書に「沈黙と微笑」料と絆 など。早稲田大学、東京大学講師。アジアプレス代表。

旅の始まりはさんざんであった。勇躍車に乗り込み、長江の上流(金沙江)を目指したものの、山道をくねくね登るにつれ、悪寒が身体を走り抜け、猛烈な吐き気に襲われ始めた。こうなってはダメである。胃壁を痙攣させながら、内容物をあたりに吐き散らかしてしまった。

チャムド(昌都)を出発してから2時間、典型的な高山病である。そもそもチベットに着いた翌日から、四千数百メートルの峠を越えようなどという日程を組んだのが間違いのもつた。

昔、人民解放軍が建設したという川蔵





長江 ——チヤムド——上……を行く

公路(北路)を引き返し、そのまま人民病院に入院するはめになってしまった。これでチベットは4回目というのだから、われながらあまりに情けなく惨めである。

今回の取材はチベットから上海まで、

長江沿いの五千数百キロを下ってみようという企画である。まだ先は長いのに、つけからつまずいてしまった。

旅の起点となったチヤムドはカム地方(東チベット)の中心地。標高3300メートル、人口は約2万5000人という静かな町である。ここで四川省成都から北西に延びてきた川蔵公路の北路と南回りの南路が合流する。

外国人の宿は昌都飯店のみ。数年前に改装し、食堂や麻雀ルームやらなかなか設備もよらしい。ここでは偶然、ス



イスから一時帰国したという活仏に出会った。この人はカム地方では4番目に位の高い高僧の生まれ変わりであり、時々、故郷に戻ってくるという。ヨ

ロッパ生活が長いため、「ここに来ると私も高山病になるのです」と照れ臭そうに笑いながら、気軽に会話に応じてくれる。ただ袈裟姿はどこかしくり馴染んでおらず、あまりお坊さんらしく見えない。人柄の良さはともかく、肝心のありがたみの方はどうなるだろうか。

そんなことをチベット人の運転手に尋ねると、「活仏は前世でいっぱい修業したのだから、今生は何をしても許される。大切なのは彼が活仏であるという事実だ」とありがたみの有無など一向気に留める風はない。このあたりチベット仏教のおおらかさは好ましく思える。

連日、宿の前には活仏の祝福を授かるうとする人々が押しかけ、彼の滞在中、チヤムドはちよっとしたお祭りのような華やいだ雰囲気包まれていた。

私も身体の調子が回復するまで、この活仏の追っかけをやってみた。行く先々、山のように人々が集まってくる。活仏はその信者たちひとりひとりの頭に手を添え、祝福を繰り返す。高山病に苦しみながらも、自分の役目を誠実に果たそうとする姿は、痛々しいほどである。宿に戻ると、「ふうっ……と小さなため息が彼の形のいい口からこぼれたものである。」